

忘却の偽英雄 〈凍結〉

泰野 厘智弥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

記憶を失った少年はヒーローになる為にひた走る物語。

目次

試験と始まり	1
個性把握テスト	5
戦闘訓練 前編	9
戦闘訓練 中編	13

試験と始まり

俺には記憶がない。

名前と年齢以外の記憶が綺麗さっぱり無くなっていた。

生まれて12年、何を為したのか、どのような人間関係を気付いていたのか。

自分の事は何も分からなかったが、ヒーローになりたい。ならなくてはならない。

そんな想いだけが俺の胸の中を渦巻いていた。

俺はその想いの旨を父に伝えてヒーロー科最難関である雄英高校を受験することを告げた。

記憶がハッキリしてから3年余り、家の職業柄戦闘訓練、筋トレや戦闘技術向上の為の訓練は欠かさず行ってきた。

個性と呼ばれる異能力が一般化され、ヒーローは職業となったことになる事自体は難しい事ではない。

しかし、敵も個性を使ってくる故にその危険度は警察などには引けを取らないどころかこちらの方が危険性は高いのだ。

そんな中、俺に発言した個性は常時発動の身体強化型の個性と表向きは公開されている。

とまあ、俺は日課になっているランニング、筋トレ、技術トレーニングを行い雄英高校入試に向かった。

※※※※※※※※※※

『今日は俺のライヴによるこそー!!!』

『エヴィバディセイハイ!!!』

「「「「.....」」」」

プロヒーロー、プレゼントマイク。

彼の大きな挨拶に誰一人返さない状況にプレゼントマイクはガッ

クリと肩を落としながらも試験の内容、ルールを説明していく。

『入試要項通り!!十分間の「模擬市街地演習」を行ってもらおうぜ!持ち込みは自由!プレゼン後は各自指定の演習会場へ向かってくれよな!!』

『演習場には仮想敵を三種・多数配置してあり、それぞれの「攻略難易度」に応じてポイントを設けてある!!』

『各々なりの個性で仮想敵を行動不能にし、ポイントを稼ぐのが君達の目的だ!!』

『もちろん他人への攻撃等、アンチヒーローな行為はご法度だぜ!』

その後は前の席に座っていた眼鏡の少年がプレゼント・マイクへの質問をして幕を閉じた。

『俺からは以上だ!最後にリスナーへ我が校校訓をプレゼントしよう』

『かの英雄ナポレオンⅡボナパルトは言った!「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者」と!!Plus ultra!!それでは皆良い受難を!!』

相手はロボ、力の加減をせずに済むことに少しのワクワク感を感じながら俺は実技試験の会場に足を運ぶのだった。

※※※※※※※※※※※※

広いな……

案内された会場は校内に設けられた1つの街だった。

この中に無数のロボが徘徊しており、それを破壊しより多くのポイントを取ったものが晴れて雄英生になる事が許される。

『ハイ!スタート!!』

「「え?」」

『どうしたあ?!実践じゃカウントダウンなんざねえんだよ!!走れ走れえ!!賽は投げられてんぞ!!?』

スタートの合図と共に駆け出した俺は仮想敵を探しギアを上げていく。

『標的発見！ブツ殺』

「悪いが構ってる暇無い」

俺は仮想敵の頭部を掴み引きちぎると投げ捨て次なる標的を探し駆け出した。

『残り10分!!』

まだ10分もあるのか、まだまだ余裕だな

『残り5分!!』

85P、これだけ取っていれば大丈夫だろう……

そう思っていた時だった。

建物を倒しながら異常なデカさの仮想敵がその姿を現した。

「いったあ……」

「大丈夫か？」

「え、あ、に、逃げ」

「いや……」

倒壊した瓦礫の下敷きになった少女を救うべく少女の元へ歩み寄る。

しかし、危険を察じた少女の言葉を遮る様に巨大仮想敵の拳が振り下ろされた。

「……全反撃」
フルカウンター

まるで何かに弾かれたかのように巨大仮想敵の腕が弾け、その巨体がゆっくりと倒れ始めた。

それに伴い仮想敵の体のあちこちから爆煙が立ち上り爆発しながら崩れていきガラクタの山に変わっていた。

他の受験者達は啞然とした様子で先程目の前で行われた不可思議な現象に目が離せなくなっていた。

俺は下敷きになっていた少女の瓦礫を退け、抱き上げた。

少女は顔を赤くしながらあたふたしていたが無視して怪我人を治療しに来ていたりカバリーガールの元に運んで行った。

※※※※※※※※※※

雄英高校入試の結果は首席合格だった。

そんな俺は今実家に帰って来ていた。

「良く帰って来たね」

「ただいま父さん」

「……雄英の……入試の結果が帰って来たようだね。」

「……合格、首席だよ」

「そうか、それは素晴らしい。」

「今日はその報告だけに来たよ。」

「そうか。いつでも帰って来るといい。」

俺は報告を済ませると父の部屋を出た。

最低限の報告を済ませたので帰ろうと玄関の扉に手を掛けた時
だった。

「兄様！」

「ん……？千棘か」

「もう帰っちゃうの？」

「ああ」

「そんな……」

「大丈夫、休みの日には会いに来てやるから」

「ほんと？」

「当たり前だ。じゃあな」

「うん……約束だからね！出久兄様！」

義理の妹の頭を撫で俺は今度こそ実家を出た。

そして今度こそ実感し始めていた。

自身がヒーローの道に足を踏み入れたことを……。

言い忘れていたが、これは緑谷出久がヒーローになる物語だ。

個性把握テスト

朝イチで学校にやって来て紙に記された教室の扉を開いた。

案の定俺が一番乗りな訳だが……こんな性格な割にやはりどこかワクワクしている自分も居るようだ。

すると

「あれ、一番じゃなかったかあ」

「ん、悪いな。まあ、俺も来たばつかなんだけどな」

「あたし、耳郎響香」

「緑谷出久だ」

耳の伸びた少女、耳郎響香と挨拶を交わし雑談にふけっているとどんとクラスメイト達がやってきた。

さすがはヒーロー科最難関の学校だけあって容姿もキャラも個性的な奴ばかりだ。

そんな時だった。

「デク……？」

「ん？」

心底驚いたような表情を見せる目付きの悪い男子生徒と目が合った。

何故だか反応してしまい視線を向けたがどうやら俺で間違いなかったようだ。

「悪い、俺は緑谷出久だ。デクって奴に似てたか知らんが俺はデクなんて奴じゃねえぞ」

「てめえ以外デクが居るわけねえだろオが……今の今まで何してやがった……」

「俺、どつかであんたに会ったことあるか？」

「ツツツツツツ!?!」

目付きの悪い男子生徒の表情に影が入る。

どこかショックを受けた様子の彼に声を掛けようと口を開いた時だった。

「お友達ごっこがしたいなら他所でやれ。ここはヒーロー科だぞ」

小汚い芋虫がのそのそと教室に入ってきてきた。

察するに担任か何かだろうが……なんというか教師らしい風貌ではないのは確かだ。

「静かになるまで8秒かかりました。君達は合理性に欠けるね。」

「まず君達はこの体操服を来てグラウンド集合だからよろしく。」

グラウンドにでた俺達に先生は個性把握テストなるものを行うことを告げた。

1人丸顔の少女が入学式やガイダンスなどは無いのかと聞いていたが雄英や教師は自由が売りとの事で無くなった事は確実なようだ。「ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、持久走、握力、反復横とび、上体起こし、長座体前屈、中学の頃からやってるだろ？個性禁止の体力テスト」

「国は未だ画一的な記録をとって平均を作り続けている。合理的じゃない。まあ、文部科学省の怠慢だな。」

「入試1位は確か緑谷だったな……中学の時ソフトボール投げ何mだった？」

「70mでした。」

「じゃあ個性使ってやってみろ。円から出なきゃ何してもいい。」

俺の個性は常時発動型だし……魔法を使えばもっと飛ばせるだろうが……最初は純粋な筋力で投げてみる。

どんどんとボールを握る腕に力が入っていき筋肉がギチギチと軋む音を奏で始めた。

そしてボールを投げる事で爆発するように放たれた力はボールを遙か彼方まで物凄い勢いで吹き飛ばした。

「まず自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

先生の持つ計測器に記されていた数値は967mと記されていた。

「なんだこれ！すごい面白そう！」

「個性思いつきり使えるんだ！さすがヒーロー科！」

「面白そう……か……ヒーローになる為に三年間、そんな腹づもりで過ごす気でのいるのかい？」

「よし、トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し除籍処分しよう。」

「はあああ!?!」

「生徒の如何は先生の自由……ようこそこれが雄英高校ヒーロー科だ」

一種目目……50m走

「チツ……」

「……?」

俺をデクだと呼んだ目付きの悪い男子生徒と走る事になったが相変わらず態度が悪い。

何故か舌打ちされたことに疑問を感じながらも先生の合図を待つ。

「爆そ……」

『疾走』

俺の嘆きと共に俺はゴールに辿り着いた。

結果『1秒03』

「くっ……まさかこの競技で負けるとは……!」

「超速い……どんな個性だろ」

二種目目……握力

横で500なんて数字をたたき出しているやつが居るがパワーに関してはこちらも自信があった。

主に筋力をメインで強化していた為かなりの力を引き出す事が出来る。

結果『630kg』

「さっきの障子よりやばくね?」

「どんな個性だろ」

三種目目……立ち幅跳び

これに関しても魔法を使うまでもなく筋力のみで挑んだ。

結果『48m』

「なんとという脚力だ……」

「あいつすっげえな……」

四種目目……反復横跳び

どの種目も結局は筋力で物をいわせるものだったので変に小細工をせずに挑んだ。

結果『80回』

その後も個性があまり意味をなさない長座体前屈や持久走をこなしたが持久走が常人を少し上回る結果となった。

こうして個性把握テストは何の異常も無く終わった。

「んじゃ、ぱぱっと結果発表する」

「トータルは単純に各種目の評定を合計した数だ。口頭で説明するのは時間の無駄なので一括開示する。」

このクラスの中から誰かが……

「ちなみに除籍は嘘な」

「「「はああああああ?」「」」」

「……………」

「これにて本日のカリキュラムは終了だ。書類には目を通しておけよ。」

先生はああ言っていたが恐らく本気で除籍するつもりだったのだろう。

何はともあれ雄英入学最初の試練を乗り越えることが出来たのだった。

戦闘訓練

前編

個性把握テストを終え、諸々の書類を受け取った俺は荷物を持って帰路に着いた。

「緑谷！」

朝に自己紹介をした耳郎が走って来た。

「おーい！俺も混ぜてくれよ！」

「ん？お前誰だ」

「ひどくね!?上鳴！上鳴電気！よろしくな！」

「悪いな、自己紹介したの耳郎だけだったからよ。俺は緑谷出久、よろしくな上鳴」

「おう！で、そっちが耳郎だったよな！」

「うん、よろしく上鳴」

上鳴と耳郎が加わり今までなかった賑やかな帰路にこういうのも悪くないと感じながら笑みを浮かべた。

「それにしても、緑谷個性把握テストマジ凄かったよな！」

「確かに、やっぱり増強系の個性なの？」

「まあ、そんなところだ。」

「そういえば、爆豪とは知り合いなの？」

「爆豪？」

「そう言えば、緑谷の事デクって呼んでたな」

「さあな。俺の覚えてる限りじゃあんな知り合いは居ない。」

その後も3人で談笑しながらそれぞれの自宅へ帰っていった。

そういえば、組で俺以外に雄英に入る奴が居るとか言ってたが……

「あ、おかえりなさい！」

「お前か……」

アメリカではかなりの勢力や地位を確立していたギャングの組織『ビーハイブ』。

その頭が日本人女性と結婚した事で日本にやってきたらしい。

その時に俺を拾ったと聞いていた。

そんなギャングは指定敵団体として登録されるはずだったが、ギャングらしからぬ行動もあつてただの慈善団体のような扱いになっている。

しかし、腐つてもギャング。こと戦闘においては並のヒーローに遅れは取らない。

そんなビーハイブの若き新星がこいつ、鵜誠士郎だ。

性別は女だが育ての親が男と勘違いした為にこんな名前をしているが……。

「鵜。お前が雄英に入る組の奴だったんだな」

「はい！ヒーロー科のB組に配属されました！」

「で、人の家で料理を作ってる訳は？」

「ボスの命令で……」

「親父には言っておくから早く自分の家探せ……」

結局その日は鵜を家に泊めた。

翌日からは雄英高校のカリキュラムがスタートするため早く眠りに着いた。

翌日の午前中は英語など普通の授業を受けていたのだが

「んじゃ、次の英文のうち間違っているのは？」

「おらエヴィバディ、ヘンズアップ！ 盛り上がれー!!」

プレゼント・マイクが担当する英語の授業は良くも悪くも普通だっ

た。

「へえ……美味しいな」

食堂で注文した大盛りカツ丼の味に少なからず衝撃を受けた。学校の食堂でこれほど美味しいものを安価で提供する……さすがは英雄か……。

そうこうしている内に昼休みは終わり、午後の授業が始まった。

「わーたーしーがー!!」

普通にドアから来た!!」

高笑いをしながら教室に入ってくるオールマイトにクラス内のテンションは自然と上がっていく。

「オールマイトだ……!! すげえや、本当に先生やってるんだね……!!」

「あれ、銀時代のコスチュームね!」

「ヒーロー基礎学! ヒーローの素地をつくる為、様々な訓練を行う科目だ!!」

「早速だが今日はコレ!! 戦闘訓練!!」

戦闘訓練。その響きに、全員のテンションは更に上がっていく。

「そしてそいつに伴って……こちら! 入学前に送ってもらった『個性届』と『要望』に沿って詠えた……戦闘服!!」

コスチュームを着ての戦闘訓練、これにクラスのテンションは最高潮にまで高まっていた。

「着替えたら順次グラウンド・βに集まるんだ!!」

各々がコスチュームに着替えてグラウンド・βに集まっていく。

それを見ながらオールマイトはニヤリと笑みを浮かべ……

「良いじゃないか皆、カッコいいぜ!!」

「先生! ここは入試の演習場ですが、また市街地演習を行うのでしょうか!」

フルアーマーの戦闘服を身に纏った飯田が拳手をしながら質問をぶつけた事で説明が始まった。

今回は2人1組のヒーローとヴィランに分かれての屋内戦。

状況設定は『核兵器』の隠されたヴィランのアジトへヒーローが乗り込むというもので、制限時間内にヴィランを無力化するか、『核兵器』を確保すれば、ヒーローの勝ち。

逆に制限時間内『核兵器』を守るか、ヒーローを無力化すればヴィランの勝ち。

分かりやすくいいとは思いますが問題は……

「コンビ及び対戦相手は……くじで決める!!」

「適当なのですか!？」

「プロは他事務所のヒーローと急造チームアップする事多い。その予行演習みたいなもんだろ」

「そうか……! 先を見据えた計らい……気がつかずに申し訳ありませんでした!!」

そんなやり取りを済ませた後各々が自身のチーム番号の記されたボールを見る。

Aチーム：緑谷出久&麗日お茶子

Bチーム：轟焦凍&障子目蔵

Cチーム：八百万百&峰田実

Dチーム：爆豪勝己&飯田天哉

Eチーム：芦戸三奈&青山優雅

Fチーム：口田甲司&砂藤力道

Gチーム：上鳴電気&耳郎響香

Hチーム：常闇踏陰&蛙吹梅雨

Iチーム：尾白猿夫&葉隠透

Jチーム：切島鋭児郎&瀬呂範太

「続いて、最初の対戦カードはこれだ! ヒーローがAチーム! ヴィランがDチームだ!」

Aチーム vs Dチーム。

対戦相手である爆豪は無言だが物凄い形相でこちらを見ていた。しかし、やる事は変わらない。

ヒーローとして勝利するだけだ。

戦闘訓練 中編

「ヴィランチームは先に入ってセッティングを！ 5分後にヒーローチームが潜入でスタートする。他の皆はモニターで観察するぞ！」
「飯田少年、爆豪少年は、ヴィランの思考をよく学ぶように！ これはほぼ実戦！ ケガを恐れず思いっきりな！」

度が過ぎぬ事はしないようにとオールマイトに注意を聞いてビルの中へ入っていく飯田と爆豪。

俺もチームメイトである麗日と向き合い作戦会議を始めた。

「デクくん、よろしくね！」

「麗日だったか？俺は出久だ。」

「え!?あ、ごめんね！爆豪君がデクって呼んでたから」

「気にすんな。自己紹介してなかった俺にも非はある。それに多分爆豪は俺を知り合いの誰かと勘違いしてんじやねえか。俺あいつ知らねえし。」

「そうなんや……」

「それより麗日。お前の個性って無重力か？」

「うん！」

「それが聞ければ充分だ。俺から離れるなよ」

何故か麗日が顔を赤くしはわわわとじたばたしてたが俺は気にせずビルに目を向けた。

「そろそろ5分だな。行くぞ」

作戦内容も何も無い正面突破で正面入口に足を踏み入れた。

「……爆豪か？」

建物内を歩いている中俺の唐突な呟きに麗日は目を見開いて質問を投げかけた。

「出久くん分かるの？」

「まあな……個性の副次効果である程度相手の強さがオーラとして見えるんだよ。」

「それで誰かまで分かるんや……」

「いや、個性把握テストの時に全員のオーラを見て覚えただけだ。」
「すごいなあ……」

そして予想通り、爆豪が曲がり角で奇襲を仕掛けてきた。
「見えてたぜ」

爆豪の放った一撃、右の大振りから放たれた爆破を俺は素手で掴んだ。

「なっ!？」

奇襲が防がれるとは思っても見なかったのだろう。驚愕の表情を浮かべながら俺から距離を取る。

「てめえ……今の今まで何処にいやがった……」

「お前……俺の何を知ってる?」

「本当に忘れたんだな……」

爆豪はそれだけ言うのと戦闘態勢を取る。

「私情を挟んで悪かったなあ……こっからヴィランとしててめえを潰す!!」

「麗日!俺がここで爆豪を相手する!!お前は飯田を見つけ次第俺に連絡しろ!!」

俺は簡潔に麗日に指示を出すと爆豪は俺めがけて爆破による拳を振り下ろした。

「ハッ……来い!!爆豪オ!!!」

「デクウウウ!!!」

爆破を使って縦横無尽に飛び回りながら俺に攻撃を加える爆豪。

それを見切り確実に避けていく。

「おいおい、爆豪と緑谷なんて戦いだよ……」

「あいつら学生のレベル超えてねえか!？」

「凄まじいですわね……」

「ハアツハア……まさかてめえがここまで……」

「終わりか?」

「ツツツはっ……とっっておきはこれからだ!!死にたくなけりやあ避けろよ……ヒーローオ」

ニタアと笑う爆豪はまさにヴィランそのものだったが俺は爆豪の想いに応えなければと思ひ拳を強く握った。

かつちゃんすげー! 字読めるの?

んで、デクって何も出来ねーやつのことなんだぜ!

やめてよお……

すげえ、かつちゃん。何回跳ねた?

7回! デクは?

0回……

おお、これは凄い「個性」だ!

ヒーロー向きの派手な「個性」ね。勝己君

デクって「個性」が無いんだって

ムコセーって言うんだって

ダッセー!

過去の記憶が今爆豪の脳内でフラッシュバックされていた。

爆豪だけが知る出久の記憶が……

爆豪は覚悟が決まったのか左手に持っていた右腕の籠手のピンを引き抜いた。

そして次の瞬間、ビル全体を揺らし、その一角を吹き飛ばすほどの大爆発が発生した。

「やったか……」

爆煙と土煙がたちこむ中爆豪の無線にオールライトが大声を出した。

『爆豪少年! これは訓練だぞ!』

「お前……まだまだ強くなるぜ」

「なっ……」

「だがこれで終わらせてもらう」

背後から聞こえた幼馴染の声に爆豪は慌てて振り返ろうとした瞬間

「がっ……!?!」

首に強烈な衝撃を受けてその場で意識を手放した。

「さて……麗日は上か」

俺は爆破を受けたダメージでボロボロになったロングコートを脱ぎ捨てる。

黒いライトアーマー姿になった俺はスキルを使ってその場から姿を消した。

「くう……飯田くんめ……」

「ゲハハハッ！俺はヴィラン……至極悪いぞお」

麗日の元へやってくると核兵器の置かれている部屋はチリひとつ無くなっていた。

麗日の個性対策か厄介な……

「待たせたな。麗日」

「きやあ!?!出久くん！？」

「悪い、驚かせたか」

「あ、ううん。大丈夫！ってそれより出久くんの方こそ大丈夫なん!?!
下からすごい音したけど」

「問題ない。服が焼けたくらいだ。それより状況は？」

「私が来てることバレちゃったから投降するようには呼びかけてるんだけど……」

「なら麗日。俺が合図を出したら核兵器まで走れ」

「分かった!!」

俺は再びスキルで姿を消した。

麗日はそれを見ながら「消えた……」と幽霊を見るような顔で言っていたが俺は配置に着くと麗日に合図を出した。

「ハアアアア!!」

「フハハハハハッ！ 遅い！ 遅い！ 遅すぎる!!」

飯田は猛スピードで麗日の元へ駆けていく。

飯田が麗日に追いつき手を伸ばそうとした時だった。

「油断したな………ヴァラン」

「な!? 緑谷くん!?!」

爆豪の時のように背後から現れて頭を床に叩きつけて拘束する。

その間に麗日は核兵器に触れー

「核兵器！ 回収!!」

麗日は笑顔で俺元に手を上げてやってきた。

俺もそれに応えて手を出すと麗日は自身の手で俺の手を叩いた。

ヒーローチーム！ WIN!!

戦闘訓練1戦目は俺と麗日のハイタッチによって幕を下ろした。